

徳島大学総合科学部 人間科学研究  
第20巻 (2012) 1-11

## 対人認知が社会的スキルに及ぼす影響

稲畑陽子<sup>1)</sup> 原田素美礼<sup>1)</sup> 境 泉洋<sup>2)</sup>

Influence of interpersonal cognition on social skills

Yoko INAHATA<sup>1)</sup> Sumire HARADA<sup>1)</sup> Motohiro SAKAI<sup>2)</sup>

### Abstract

The purpose of this study was to investigate the effect of interpersonal cognition on the social skills. Results revealed that the participants of this study held higher social skills for their friend who they had a favorable impression than for those with a bad impression. It was also found that the participants who held low social skills for a friend with a favorable impression also held low social skills towards a friend with a bad impression. From these results, it is considered that social skills are dependent on impressions of the other person. The data analysis also found the impression of the other person causes a social skills deficit. In addition, results suggest a social skills deficit may occur in people with high social skills.

Key Words : social skills, interpersonal cognition, social skills deficit

---

<sup>1)</sup> 徳島大学大学院総合科学教育部

Graduate school of Integrated Arts and Sciences, The University of Tokushima

<sup>2)</sup> 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima

## I 問題と目的

社会的スキル (social skill) とは、対人関係を円滑にはこぶために役立つスキル (技能) のことである (菊池, 1988). 社会的スキルの不足は、抑うつや孤独感、対人不安と関連がある (相川, 2007). そのため、このような不適応に対する治療的または予防的取り組みとして、社会的スキルを直接的に指導しようとする社会的スキル訓練 (social skills training: 以下, SST) が行われている. しかし, SST による友人関係や適応の改善が報告される一方で (江村ら, 2003; 石川ら, 2010 など), その効果の持続性や日常場面への一般化が示されていない研究も少なくない (相川, 1999; 金山ら, 2004 など).

適切なスキルを身につけているか否かと、他者と積極的に関わろうとするか否かは別の観点である (岡田, 2008). 社会的スキルの欠如のタイプの1つに、必要な場面で社会的スキルを実行しようとしていないタイプがある (Gresham, 1988). 磯部ら (2004) はこのタイプに着目し、親和動機の低さが社会的スキルの実行を妨げている可能性を示唆している. また、石井 (2007) は相手との関係性に着目し、相手との親密性の違いにより社会的スキルの行使頻度が異なることを明らかにしている. このことから、社会的スキルは、常に一定のレベルで実行されるものではなく、相手によって使い分けられているものと考えられる.

対人関係形成において、「評価者が対象者をどのようにみなしているか」ということは重要な意味を持つとされている

(佐相ら, 1996). しかし、相手に対する印象が評価者の社会的スキルに及ぼす影響について検討した研究はみられない. 相手との関係性によって社会的スキルを使い分けることは適応につながると考えられるが、悪い印象を持つ相手に対して社会的スキルを実行しない場合は、相手との関係が悪化し、不適応につながると考えられる. そこで本研究では、相手のパーソナリティをどのように捉えているかという、対人認知の違いが社会的スキルの差につながるのかについて検討する.

本研究では、社会的スキルを使用する対象として、好印象・悪印象を与えるような架空の人物を用いる. 架空の人物と自己との関係性を統制するために、架空の人物を「同性で同学年の友人」に統一する. 青年の重要な対人関係の一つに友人関係があるが、異性の友人関係となると恋愛関係との差異を見いだすのが困難であることから (和田, 1993), 架空の人物を同性の友人に設定する. しかし、同性愛者は同性に性的欲求を抱くため、同性の友人と安定した関係を築くのが難しいとされている (有馬ら, 2010). そこで、本研究では恋愛対象が自分と同性の相手となる同性愛者および両性愛者を分析の対象から外すこととする.

まず予備調査で、大学生が好印象または悪印象を抱くような架空人物の刺激文を作成する. その上で、本調査で各人物への社会的スキルを測定・比較する.

## II 予備調査

### 1. 調査対象者

A大学の学生117名を対象に、質問紙調査を行った。

欠損値については、尺度の10%未満のものは最頻値を代入し、10%以上のものは解析から除外した。また、本研究の目的から、同性愛者または両性愛者に該当する方は分析の対象には含まれなかった。分析対象者は、112名（男性59名、女性53名）。平均年齢は18.70歳で、 $SD=0.69$ であった。

### 2. 調査手続き

講義時間中に質問紙を配布・回収した。調査時期は2011年10月中旬。質問紙は個人の特定ができないよう無記名・任意で行われることなど、調査に関する説明を行った。

## 3. 質問紙の構成

### ①フェイスシート

学部、学科、学年、年齢について回答を求めた。

### ②特性形容詞尺度

林（1978）によって作成された全20項目からなる特性形容詞尺度を用いた。

「あなたが、同性の中で友人にしたいと思う人物像を出来るだけ具体的に思い浮かべて下さい。」「あなたが、同性の中で友人にしたくないと思う人物像を出来るだけ具体的に思い浮かべて下さい。」と教示した上で、「感じのよい—感じのわるい」等の形容詞対を提示し、それぞれの人物像が各形容詞対にどのくらい当てはまるかをSD法7段階評定で回答を求めた。

### ③友人にしたいタイプ・友人にしないタイプの特徴

友人にしたいタイプ・友人にしないタイプの特徴（性格や行動）について、

Table1 友人にしたいタイプと友人にしないタイプの平均値の比較

	悪印象の友人 (n=117)		好印象の友人 (n=117)		t値
	M	SD	M	SD	
1. 消極的—積極的	2.51	1.72	5.05	1.00	11.99 ***
2. 人のわるい—人のよい	1.63	0.84	5.72	1.08	28.13 ***
3. なまじきな—なまじきでない	2.13	1.50	4.80	1.32	13.32 ***
4. 近づきたい—ひとなつこい	2.43	1.41	4.94	1.23	12.34 ***
5. にくらしい—かわいらしい	1.96	1.21	5.21	1.10	19.14 ***
6. 心のせまい—心のひろい	1.86	1.03	5.76	1.25	24.55 ***
7. 非社交的—社交的	2.44	1.56	5.44	1.16	14.21 ***
8. 責任感のない—責任感のある	1.96	1.24	5.13	1.47	15.75 ***
9. 軽率な—慎重な	2.29	1.32	4.67	1.08	13.04 ***
10. 恥じしらずの—恥ずかしがりの	3.38	1.89	3.76	0.95	1.64 †
11. 軽薄な—重厚な	2.62	1.42	4.85	1.08	11.09 ***
12. 沈んだ—うきうきした	2.50	1.56	5.07	1.02	12.53 ***
13. 卑屈な—堂々とした	2.27	1.48	5.11	0.99	14.87 ***
14. 感じのわるい—感じのよい	1.78	1.05	5.94	0.96	25.97 ***
15. 無分別な—分別のある	2.07	1.31	5.68	1.23	17.36 ***
16. 親しみにくい—親しみやすい	2.25	1.33	5.82	1.07	18.87 ***
17. 無気力な—意欲的な	2.46	1.51	5.22	1.05	13.64 ***
18. 自信のない—自信のある	2.79	1.45	4.88	0.91	11.68 ***
19. 短気な—気長な	2.04	1.13	5.47	1.08	18.80 ***
20. 不親切な—親切な	1.87	1.02	5.88	0.81	27.47 ***

†:  $p < .10$  \*\*\*:  $p < .001$

それぞれ自由記述で回答を求めた。

④回答者の性別，恋愛対象となる性別

**4. 印象評定**

友人にしたい人物像・友人にしたくない人物像の印象を比較するために  $t$  検定を行った。その結果，項目 10 を除く全ての項目で有意差が確認された（全て  $p < .001$ ）。また，項目 10 では有意な傾向が確認された（ $p < .10$ ）。このことから，予備調査において回答者が想定した友人にしたい人物像は，友人にしたくない人物像よりも好印象であったことが明らかとなった（Table1）。

**5. 刺激文の作成手続き**

分析対象者 112 名の内，友人にしたいタイプには 86 名（男性 40 名，女性 46 名）が回答し，計 174 個（一人当たり 2.02 個）の記述が，友人にしたくないタイプには 87 名（男性 41 名，女性 46 名）が回答し，計 170 個（一人当たり 1.95 個）の記述が得られた。KJ 法を用いて自由記述のデータを分類した結果，友人にしたいタイプについての自由記述は 13 カテゴリー，友人にしたくないタイプについての自由記述は 14 カテゴリーに分類された。

刺激文の作成には KJ 法で分類されたカテゴリー名を用いたが，カテゴリー数が多かったため，カテゴリーに含まれる記述数が多かったもの（「その他」を除く）から順に 6 カテゴリーずつを用いることとした。上位 6 カテゴリーに含まれる記述数は，友人にしたいタイプでは総記述数の 70% を，友人にしたくないタイプでは総記述数の 72% を占めている。この結

果をもとに好印象の友人・悪印象の友人の刺激文を作成した。刺激文を作成する上で，カテゴリー一名をそのまま用いると文章が不自然になる場合は，そのカテゴリーの下位カテゴリー一名を用いて表現を修正した。

**6. 作成された刺激文**

①好印象の友人の刺激文

A さんはあなたと同姓で同学年の友人です。A さんは社会的で明るく，周りの人にもあなたに対しても優しい人です。あなたと A さんはとても気が合うので，あなたは A さんと一緒にいると楽しい時間を過ごすことができます。何事にも積極的に取り組む A さんを，周りの人は尊敬しています。

②悪印象の友人の刺激文

B さんは，あなたと同姓で同学年の友人です。B さんは自己中心的で周りの空気が読めない，非常識な人です。人の気持ちを考えないところがあり，あなたに対して嫌味や悪口を言ってきます。その反面，B さんは消極的なので，一緒にいるとストレスを感じるがあります。

**III 方法**

**1. 調査対象者**

A 大学の学生 323 名を対象に質問紙調査を行った。

欠損値については，尺度の 10%未満のものは最頻値を代入し，10%以上のものは削除した。また，本研究の目的から，同性愛者または両性愛者に該当する方は分析の対象から外した。

その結果，分析対象者は，281 名（男

性 142 名，女性 139 名）。分析対象者の平均年齢は 19.27 歳で， $SD=1.06$  であった。

## 2. 調査手続き

調査時期は 2011 年 11 月中旬～12 月上旬で，予備調査と同様の手続きで調査を行った。

## 3. 使用尺度

### ①特性形容詞尺度（林，1978）

林（1978）によって作成された全 20 項目からなる特性形容詞尺度を用いた。「感じのよい—感じのわるい」等の形容詞対を提示し，好印象の友人および悪印象の友人が各形容詞対にどのくらい当てはまるかを，それぞれ SD 法 7 段階評定で回答を求めた。

### ②成人用ソーシャルスキル自己評定尺度（相川・藤田，2005）

相川・藤田（2005）によって作成された社会的スキル尺度を用いた。この尺度は 6 下位尺度 35 項目で構成されているが，「友だち」「人」「相手」など，項目間で社会的スキルを使用する対象に異なった表現が見られたため，それらを「相手」に統一するなど，表現を一部修正した。また，初対面の相手に対するスキルを問う項目や相手を特定しない尋ね方をしている項目，本研究の目的に沿わない項目を除いた 5 下位尺度 23 項目を用い，「ほとんどあてはまらない：1」から「かなりあてはまる：4」の 4 件法で回答を求めた。

得点の算出に当たっては，樋口ら（2007）を参考に，数値が高くなるほど肯定的内容の形容詞となり印象が良くなるように適宜逆転項目とした。しかし，

項目 10「恥じしらずの—恥ずかしがりの」などは，必ずしもどちらか一方の極がより好ましいとは言えない。そこで本研究では，林（1976）が数量化第三類の分析結果などに基づいて定めた「価値的により望ましいと考えられる方向」を肯定的内容とした。

## 4. 場面設定

社会的スキルの測定にあたり，特に悪印象の友人に対しては関係の回避が働く可能性が考えられる。そこで本研究では，相手と接する頻度の差が社会的スキルの差につながらないように，社会的スキルを使用する場面を設定することとした。調査対象者である大学生にとって自然な場面であること，相手に社会的スキルを使用する必要性が生じるような場面であること等を考慮し，以下のような場面を設定した。

「あなたは，大学の授業で A さん（B さん）とペアを組んで発表をすることになりました。1 か月後の発表に向けた準備を A さん（B さん）と協力して行わなければなりません。発表内容は教員によって採点され，その得点に応じて科目の成績が決定します。」

## 5. 質問紙の構成

### ①フェイスシート

学部，学科，学年，年齢について回答を求めた。

### ②好印象の友人（A さん）について

刺激文の提示，印象評定，A さんの印象（自由記述），A さんに対する場合の社会的スキルの測定

③悪印象の友人 (Bさん) について

刺激文の提示, 印象評定, Bさんの印象 (自由記述), Bさんに対する場合の社会的スキルの測定

④回答者の性別, 恋愛対象となる性別

刺激文提示の順番による効果が出ないように, ②と③を入れ替えてカウンターバランスをとった。

IV 結果

1. 特性形容詞尺度の因子分析

特性形容詞尺度に関する一連の研究では, 「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」「活動性」に該当する各因子が抽出されている。しかし, 各因子に含まれる項目は調査によって若干の差異がある。そのため, 確認的因子分析を行った。

好印象の友人および悪印象の友人に対する評定結果を合わせて, 最尤法により因子分析した (サンプル数は, 分析対象

者 281×刺激人物 2=562 サンプル)。因子の抽出には最尤法を用いた。因子数は解釈可能性を考慮し, 3因子とした。各項目の内, 項目 10「恥じしらずの一恥ずかしがりの」は, 因子抽出後の共通性が 0.25 と, 他の項目と比較して明らかに低かったため削除された。その後, 最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った結果, 19項目 3因子が抽出された。3因子の累積寄与率は 71.89%であった。

各因子に含まれる項目を確認したところ, 林 (1978) の研究と似た因子構造をしていることが分かったため, 因子名は同じものを使用することとした。第 I 因子は「感じのわるい—感じのよい」, 「人のわるい—人のよい」などに対して負荷量が高かったため, 「個人的親しみやすさ」に関する因子とした。第 II 因子は「軽率な—慎重な」, 「軽薄な—重厚な」などに対して負荷量が高かったため「社会的

Table2 特性形容詞尺度の因子分析

項目	I	II	III
第 I 因子: 個人的親しみやすさ ( $\alpha=.97$ )			
14. 感じのわるい—感じのよい	.94	.02	.01
2. 人のわるい—人のよい	.84	.03	.03
20. 不親切な—親切な	.82	.06	.06
5. にくらしい—かわいらしい	.73	.11	.03
7. 非社会的な—社会的な	.72	-.04	.26
16. 親しみにくい—親しみやすい	.71	.11	.14
1. 消極的な—積極的な	.59	.02	.33
4. 近づきたい—ひとなつこい	.58	.10	.15
3. なまいきな—なまいきでない	.54	.27	.08
6. 心のせまい—心のひろい	.53	.30	.08
19. 短気な—気長な	.41	.35	.09
第 II 因子: 社会的望ましさ ( $\alpha=.84$ )			
9. 軽率な—慎重な	-.07	.85	.00
11. 軽薄な—重厚な	.07	.76	-.10
8. 責任感のない—責任感のある	.05	.59	.18
15. 無分別な—分別のある	.29	.51	.04
第 III 因子: 活動性 ( $\alpha=.90$ )			
18. 自信のない—自信のある	-.11	-.02	.95
12. 沈んだ—うきうきした	.34	-.07	.59
13. 卑屈な—堂々とした	.16	.12	.59
17. 無気力な—意欲的な	.35	.07	.50
因子間相関			
	I	II	III
I	—		
II	.80	—	
III	.82	.64	—

Table3 相手による社会的スキル使い分け

	悪印象の友人 (n=281)		好印象の友人 (n=281)		t値
	M	SD	M	SD	
総得点	59.01	9.00	64.23	8.21	9.26 ***
解読	16.10	3.61	16.00	3.17	-0.42
主張性	15.20	3.56	15.96	3.43	3.65 ***
感情統制	9.59	2.41	10.31	2.12	5.17 ***
関係維持	8.14	1.91	9.53	1.69	11.46 ***
記号化	10.00	2.51	12.44	2.27	13.49 ***

\*\*\*: p < .001

Table4 社会的スキル高群と低群の比較

	低群 (n=81)		高群 (n=74)		t値
	M	SD	M	SD	
総得点	54.85	7.61	63.61	11.60	-5.50 ***
解読	14.85	3.27	17.23	4.47	-3.75 ***
主張性	13.75	3.46	16.22	4.40	-3.85 ***
感情統制	9.15	2.00	10.45	2.92	-3.20 ***
関係維持	7.53	1.72	9.11	2.19	-4.95 ***
記号化	9.57	2.18	10.61	3.26	-2.31 *

\*: p < .05 \*\*\*: p < .001



望ましき」に関する因子とし、第Ⅲ因子は「自信のない—自信のある」、「卑屈な一堂々とした」などに対して負荷量が高かったため「活動性」に関する因子とした。

また、各因子の内的整合性を確認するために、各因子についてのクロンバックの  $\alpha$  係数を算出した。その結果、第Ⅰ因子(個人的親しみやすさ):  $\alpha = .97$ , 第Ⅱ因子(社会的望ましき):  $\alpha = .84$ , 第Ⅲ因子(活動性):  $\alpha = .90$  であった。

いずれの因子においても高い内的整合性が確認されたため、以後の分析では、この3因子19項目を用いることとした (Table2)。

## 2. 相手による社会的スキルの違い

社会的スキルを実行する相手を独立変数、社会的スキルの総得点を従属変数とする  $t$  検定を行った。その結果、社会的スキルの総得点は好印象の友人に対する場合が、悪印象の友人に対する場合よりも有意に高かった ( $t(280) = 9.26$ ,  $p < .001$ )。また、各下位尺度について同様に  $t$  検定を行ったところ、「解読」を除いた全ての下位尺度で、好印象の友人に対する場合が、悪印象の友人に対する場合よりも有意に高かった (Table3)。

## 3. 社会的スキル高群と低群の比較

好印象の友人に対する社会的スキルの総得点について、平均  $+0.5SD$  を好印象の友人に対する社会的スキル高群、平均  $-0.5SD$  を低群とした。好印象の友人に対する社会的スキルの高低群を独立変数、悪印象の友人への社会的スキルの総得点を従属変数とした  $t$  検定を行った結果、低群は高群よりも悪印象の友人への社会的スキルが有意に低いことが明らかになった ( $t(124) = -5.50$ ,  $p < .001$ )。また、下位尺度についても同様の結果が得られた (Table4)。

## 4. 対人認知と社会的スキルの実行欠如の関連

印象得点の差が大きいほど印象の好—悪の判断に開きがあることを示し、社会的スキル得点の差があるということは社会的スキルの実行欠如が起きていることを示す。

したがって、印象総得点の差(好印象—悪印象)と、社会的スキル総得点の差(好印象の友人に対する場合の得点—悪印象の友人に対する場合の得点)の相関係数を求めることで、対人認知の差と社会的スキルの実行の差との関連を検討した。

Table5 対人認知と実行欠如の関連

	印象総得点の差
「社会的スキル総得点」の差	0.24 **
「解読」の差	0.00
「主張性」の差	0.03
「感情統制」の差	0.19 **
「関係維持」の差	0.36 **
「記号化」の差	0.34 **

\*\*: $p < .01$

Table6 対人認知と実行欠如の関連(スキル低群・高群の比較)

	印象総得点の差	
	好印象の友人に対する社会的スキル 低群	高群
「社会的スキル総得点」の差	0.16	0.38 **
「解読」の差	0.03	0.08
「主張性」の差	0.00	0.04
「感情統制」の差	0.06	0.40 **
「関係維持」の差	0.26 *	0.45 **
「記号化」の差	0.23 *	0.47 **

\*: $p < .05$  \*\*: $p < .01$

その結果、印象の差とスキルの差の間に弱い正の相関が認められた ( $r = .24$ ,  $p < .01$ )。社会的スキルの下位尺度について同様に相関係数を求めたところ、印象総得点の差は、「関係維持の差」との間に正の相関 ( $r = .36$ ,  $p < .01$ ) が、「記号化の差」との間には正の相関 ( $r = .34$ ,  $p < .01$ ) が認められた。しかし、その他の下位尺度については、相関は認められなかった (Table5)。

### 5. スキル未獲得と実行欠如

対人認知の差と社会的スキルの実行の差との関連を、好印象の友人に対するスキルの高群と低群に分けて比較した。好印象の友人に対する社会的スキルの総得点について、平均 + 0.5SD を好印象の友人に対する社会的スキル高群、平均 - 0.5SD を低群とした。印象総得点の差 (好印象 - 悪印象) と社会的スキル総得点の差 (好印象の友人に対する場合の得点 - 悪印象の友人に対する場合の得点) の相関係数を高群と低群、それぞれについて求めた。

高群では、印象の差とスキルの差の間に弱い正の相関が認められた ( $r = .38$ ,  $p < .01$ )。一方、低群では印象の差とスキルの差の間に相関は認められなかった ( $r = .16$ ,  $n.s.$ )。

社会的スキルの下位尺度について同様に相関係数を求めた。その結果、高群において、印象総得点の差は「感情統制の差」 ( $r = .40$ ,  $p < .01$ )、「関係維持の差」 ( $r = .45$ ,  $p < .01$ )、「記号化の差」 ( $r = .47$ ,  $p < .01$ ) との間に正の相関が認められた。また、低群においては、印象総得点の差

は「関係維持の差」 ( $r = .26$ ,  $p < .05$ )、「記号化の差」との間に弱い正の相関 ( $r = .23$ ,  $p < .05$ ) が認められた (Table6)。

## V 考察

### 1. 相手による社会的スキルの違い

好印象の友人・悪印象の友人に対する社会的スキルの総得点を比較した結果、好印象の友人に対する場合は悪印象の友人に対する場合よりも社会的スキルが高いことが明らかになった。また、「解読」を除いた全ての下位尺度で、好印象の友人に対する場合は悪印象の友人に対する場合よりもスキルが高いことが明らかになった。

この結果から、好印象の友人に対する場合は悪印象の友人に対する場合よりも社会的スキルが高いことが分かった。相川ら (1993) は社会的スキルの生起過程に関するモデルを提唱し、社会的スキルの実行までには、①相手の反応を読み取る段階、②対人目標を決定する段階、③感情を統制する段階、④対人反応 (スキル) を決定する段階があり、この一連の流れ全体を社会的スキルであるとしている。「解読」には、「顔つきから相手の感情を読みとれる」、「話をしているとき、相手の表情のわずかな変化も感じとれる」といった項目が含まれるため、①の「相手の反応を読み取る段階」に当てはまる。この段階では、相手の言語的・非言語的反応を情報として収集し、それを解釈することによって対人感情が生起する。この感情が動機づけの機能を果たし、その後の過程を左右することになる。しか



し、本研究で使用した尺度では、相手の反応を解釈することで生起する感情までは測定することができていない。「解読」に差が出なかったことは、相手の反応を読み取る能力は相手の印象に関わらず一定であったということを示している。

本研究では、②以降の過程でスキルに差が生じたため、結果としてスキル全体（総得点）にも差が認められたのではないかと考えられる。

また、悪印象を持つ友人に対しては、「対人目標を決定する段階」において不適切な対人目標が選択される、または「感情を統制する段階」で不安や緊張、怒りなどの感情を抑制できないことによって、スキルが低くなっているのではないかと考えられる。

## 2. 社会的スキル高群と低群の比較

悪印象の友人に対する社会的スキルを、好印象の友人へのスキルの高群と低群で比較した結果、低群は高群に比べて悪印象の友人に対するスキルが低いことが明らかになった。

この結果から、好印象の友人に対する社会的スキルが低い人は高い人に比べて、悪印象の友人に対する社会的スキルが低いことが分かった。印象の好一悪に関わらず社会的スキルが低い人は、社会的スキルを獲得出来ていないために実行することが出来ていないと考えられる。この場合は、SSTを行うことでスキルを獲得することができる。

## 3. 対人認知と社会的スキルの実行欠如の関連

相手によって社会的スキルの得点に差

が認められたということは、スキルを獲得してはいるが相手によって使用しないという社会的スキルの実行欠如が起こっていたものと考えられる。本研究では、相手のことやその場の状況を考えて行動する「関係維持」、相手に自分の感情を素直に表現する「記号化」において、相手の印象による実行欠如が認められた。本研究の結果から、印象に差があるということが、実行欠如につながることを示唆された。しかし、相関の認められなかった下位尺度については、実行欠如の要因が他にあったという可能性が考えられる。

社会的スキルの実行欠如が起こっている場合、SSTによってスキルを獲得することができても、日常場面でスキルは実行されない。そのため、実行欠如の要因となるものへの介入が必要になる。

## 4. スキル未獲得と実行欠如

本研究では社会的スキルの未獲得と実行欠如が認められ、スキル未獲得の場合は印象の好一悪に関わらずスキルは低くなることを示唆された。そのため、社会的スキルの実行欠如が起こりやすくなるのは、スキルが高い人の場合ではないかと考えられる。そこで、対人認知と社会的スキル実行欠如の関連を、スキルの高群と低群に分けて比較した結果、好印象の友人に対する社会的スキルが高い群においては、印象の差とスキルの差が関連するということが明らかになった。つまり、スキルが高い群は低い群に比べてスキルを多く持っているため、相手の印象によってスキルを使い分けているということになる。

本研究の結果から、SSTを実施する際には、スキルを獲得できるようにするだけでなく、スキルが高い人にも注目し、実行欠如が起こらないようにする工夫が必要になると考えられる。

## VI 総合的考察

本研究の目的は、相手のパーソナリティをどのように捉えているかという対人認知の違いが社会的スキルの差につながるのかについて検討することであった。

好印象の友人と悪印象の友人に対する社会的スキルを比較した結果、好印象の友人に対する場合は、悪印象の友人に対する場合よりも社会的スキルが高いことが明らかになった。さらに、好印象の友人への社会的スキルが低い人は悪印象の友人への社会的スキルも低いことが明らかになった。この結果から、社会的スキルは相手の印象によって使い分けられていると考えられる。

また、相手のことやその場の状況を考えて行動するスキル、相手に自分の感情を素直に表現するスキルにおいて、相手の印象による実行欠如が認められた。さらに、社会的スキルの実行欠如は、社会的スキルが高い場合に起こるとということが示唆された。

本研究のような方法を用いて社会的スキルを測定することで、従来の社会的スキル尺度では測定することの出来なかった実行欠如を発見することが出来るようになることが期待される。

## VII 今後の課題

本調査の問題点として、社会的スキルを使用する相手に架空人物を用いたことが挙げられる。「好きな人・嫌いな人を思い浮かべてください」と教示した場合、人によって思い浮かべる相手(対象)は様々である。相手の性別や相手との関係性などは、それ自体が社会的スキルに影響を及ぼす可能性のある要因であると考えられる。そこで、本研究では、スキルを用いる対象の条件を統制するために、刺激文を用いることにした。しかし、本研究で検討されたのは対人認知による実行欠如のみであり、他の対象にはスキルを実行する可能性が残る。そのため、今後は実行欠如をより正確に測定することの出来る方法を検討する必要がある。

## 参考・引用文献

- 相川充・佐藤正二・佐藤容子・高山巖 (1993). 社会的スキルという概念について—社会的スキルの生起過程モデルの提唱—宮崎大学教育学部紀要社会科学, **74**, 1-16.
- 相川充 (1999). 孤独感の低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 社会心理学研究, **14(2)**, 95-105.
- 相川充・藤田正美 (2005). 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成 東京学芸大学紀要 第1部門 教育科学, **56**, 87-93.
- 相川充・藤田正美・田中健吾 (2007). ソーシャルスキル不足と抑うつ・孤独感・対人不安の関連：脆弱性モデル

- の再検討 社会心理学研究, **23(1)**, 95-103.
- 有馬將太・園田直子 (2010). 同性愛者のセクシュアリティ—研究の視点と展望— 久留米大学心理学研究, **9**, 89-97.
- 江村理奈・岡安孝弘 (2003). 中学校における集団社会的スキル教育の実践的研究 教育心理学研究, **51**, 339-350.
- Gresham, F.M. (1988). Social skills : Conceptual and applied aspects of assessment, training, and social validation, In Witt, J.C., Elliott, S.N. & Gresham, F.M. (Eds.), *Handbook of behavior therapy in education*. New York Press. pp.523-546.
- 林文俊 (1976). 対人認知構造における個人差の測定(1): 認知的複雑性の測定についての予備的検討 名古屋大学教育学部紀要, 教育心理学科, **23**, 27-38.
- 林文俊 (1978). 対人認知の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要, 教育心理学科, **25**, 233-247.
- 樋口匡貴・川村千賀子・原郁水・塚脇涼太・深田博己 (2007). 対人印象の及ぼす自己卑下呈示の効果の規定 広島大学心理学研究, **7**, 103-108.
- 石井佑可子 (2007). 「メタ・ソーシャルスキル」測定尺度作成の試み 京都大学大学院教育学研究科紀要, **53**, 286-298.
- 石川信一・岩永三智子・山下文大・佐藤寛・佐藤正二 (2010). 社会的スキル訓練による児童の抑うつ症状への長期的効果 教育心理学研究, **58**, 372-384.
- 磯部美良・堀江健太郎・前田健一 (2004). 非行少年における社会的スキルと親和動機の関係 カウンセリング研究, **37(1)**, 15-22.
- 金山元春・佐藤正二・前田健一 (2004). 学級単位の集団社会的スキル訓練—現状と課題— カウンセリング研究, **37(3)**, 270-279.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する—向社会行動の心理とスキル— 川島書店.
- 岡田涼 (2008). 親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築 教育心理学研究, **56**, 575-588.
- 佐相邦英・原岡一馬 (1996). 対人認知が信憑性評価に及ぼす効果 社会心理学研究, **12(1)**, 1-8.
- 和田実 (1993). 同性友人関係: その性および性役割タイプによる差異 社会心理学研究, **8(2)**, 67-75.

(受付日2012年10月1日)

(受理日2012年10月10日)